

文と世界との関係について

井上 優

国立国語研究所

mainoue@kokken.go.jp

中国語話者の内省判断は、日本語話者の感覚からすると不思議な感じがすることがある。

〔例1〕日本語では「2階に行く」は完全に自然な表現だが、中国語では“上二楼”と言うのが普通で、“去二楼”と言うには文脈の支えが必要である。

- (1) a. さっき黄さんが2階に行くのを見た。
b. 我刚才看到小黄上二楼去了。
- (2) a. 去二楼找王老师。(2階に行って王先生を探す。)
b. 我去二楼，你去三楼，咱们分头找一下。(私は2階，あなたは3階，手分けして探そう。)

中国語話者に「なぜ“去”ではだめか」と聞くと、「2階に上るからだ」と言われる。『なぜ“上”を使うか』ではなく、『なぜ“去”が使えないか』を聞いているのだ」と聞いても答えは同じである。「上がっていく」様子が具体的に想起される状況で、「行く」というより抽象的な表現を用いることに違和感があるのだと思われる。

〔例2〕(3)では状況変化を表す文末助詞“了”の使用が可能だが、(4)では“了”は使えず、“呢”のみが使用可能である(木村2006)。

- (3) 小李昨天在王老师家包饺子了。
- (4) 小李在厨房包饺子呢。／*小李在厨房包饺子了。

中国語話者に聞くと、「“在厨房包饺子”と聞くと、それだけで台所で餃子を包む様子が目に浮かび、それと状況変化を表す“了”は合わない」と言われることがある。これは、日本語で言えば、「台所で餃子づくりを…」と言うだけで「している」と続くことが予想されるというのに近いが、この感覚は日本語話者にはわかりにくい。

〔例3〕日本語では、「井上さんは今中国語を勉強している」という文は完全に自然な文である。一方、中国語話者は、「井上现在在学习汉语」という文は、これだけだ

といまひとつすわりが悪く，“井上現在在学习汉语呢”のように文末助詞をつける，あるいは，“井上現在在学习汉语，很忙”のように文を続けるとすわりがよくなるという。“井上現在在学习汉语”だけだと，いまひとつリアルな事象叙述という感じがしないということだと思われるが，このあたりの感覚も日本語話者にはわかりにくい。

〔例4〕日本語で「井上さんは今日本語を勉強している」と言っても，特に不自然さは感じない。一方，中国語で“小王现在在学习汉语呢”と言うと，人によっては“小王”は中国人だから，中国語を勉強するというのはおかしい」という理由で不自然と言うことがある。この例に限らず，中国語話者の内省判断を観察していると，「現実にある（ない）」ということと「表現として自然（不自然）」ということとが感覚的に一体となっている部分があるという印象を受けることがある（中川 2007 参照）。

これらの例における中国語母語話者の内省判断に共通するのは，「文が発される」ことと「現実世界が想起される」こととが一体の関係にあるということである。

井上(2006)では，日本語においては「事象の個別具体性」と「言語表現の具象性」は別個の問題だが，中国語においては両者が連動しているということを述べた。事象を個別具体的な出来事として述べるということは，その事象を時間軸の具体的な位置に定位するということである。文法カテゴリーとしてのテンスを持つ日本語は，事象を個別具体的な出来事として述べるように構造上になっており，事態を個別具体的な出来事として述べるための特別な操作は必要ない（内骨格型言語（井上 2006））。

一方，中国語は，文法カテゴリーとしてのテンスを持たず，述語自体に時間の要素が組み込まれていない。このような言語において，事象を個別具体的な出来事として述べるには，外から個別具体性を付与して，言語表現の具象性を上げて，個別具体的な出来事らしく述べる必要がある（外骨格型言語（井上 2006））。

中国語において，「文が発される」ことと「現実世界が想起される」こととが一体の関係にあるというのも，外から個別具体性を付与することの現れと見られる。

井上優(2006)「日本語から見た中国語」，『日本語学』25巻3号，明治書院

木村英樹(2006)「「持続」・「完了」の視点を超えて—北京官話における「実在相」の提案—」，『日本語文法』6巻2号，くろしお出版

中川正之(2007)「巻頭エッセイ：外からみた大阪弁・日本語・中国語」，『言語』2007年10月号，大修館書店

キーワード：日中対照言語学（文法），内骨格型言語，外骨格型言語，テンス，アスペクト